矢倉学区未来のまち協議会
「地域協働合校の取り組み」

## 1、 にこにこレストラン

「BohNo の手作り給食」

右は初めて立命館大学学生団体 BohNo さんと取り組んだ事業の募集チラシ、以下に事業の概要。(2023/1 月)

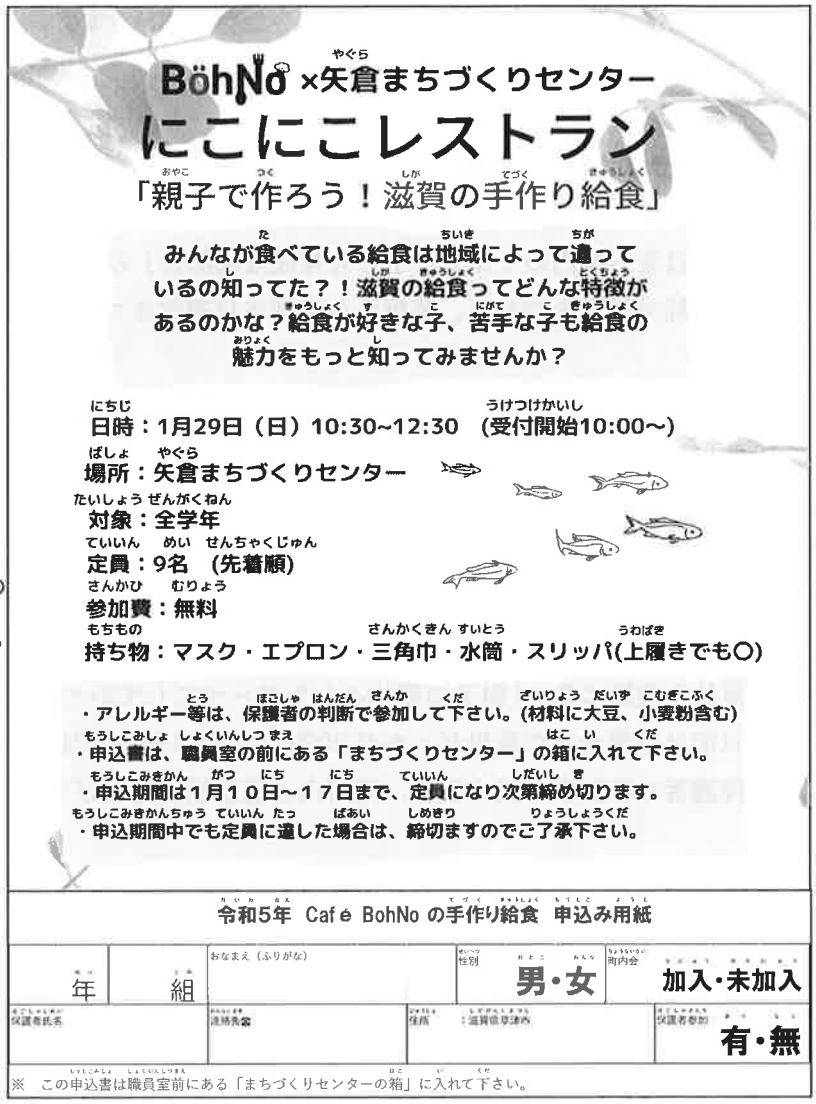
① 通常(社会福祉協議会主催)の子ども食堂と同じ事業計画内で立案し社協様とまち協が主催＆サポートし、企画と運営は学生団体「BohNo」が行う。

② 「BohNo」と共同でチラシ作成し矢倉小学校全児童対象配付し募集、希望者の受付/集計をまちづくりセンターが実施。

③ 事業の準備は「BohNo」が行い、必要経費は社協が負担する。

④ 当日の受付は地域で行い、司会進行から全体の運営も「BohNo」が行う。

⑤ 「BohNo」が企画運営を全て担う事で常に工夫が生まれ活性化する。


BöhNo ×矢倉まちづくりセンター
にこにこレストラン
「親子で作ろう！滋賀の手作り給食」
みんなが食べている給食は地域によって違っているの知ってた？！滋賀の給食ってどんな特徴があるのかな？給食が好きな子、苦手な子も給食の魅力をもっと知ってみませんか？
日時：1月29日（日）10:30~12:30 (受付開始10:00~)
場所：矢倉まちづくりセンター
対象：全学年
定員：9名 (先着順)
参加費：無料
持ち物：マスク・エプロン・三角巾・水筒・スリッパ(上履きでも〇)
・アレルギー等は、保護者の判断で参加して下さい。(材料に大豆、小麦粉含む)
・申込書は、職員室の前にある「まちづくりセンター」の箱に入れて下さい。
・申込期間は１月１０日～１７日まで、定員になり次第締め切ります。
・申込期間中でも定員に達した場合は、締切ますのでご了承下さい。
令和5年 Café BohNo の手作り給食 申込み用紙
年 組 おなまえ（ふりがな） 性別 男・女 町内会 加入・未加入
保護者氏名 連絡先 住所 ：滋賀県草津市 保護者参加 有・無
※ この申込書は職員室前にある「まちづくりセンターの箱」に入れて下さい。

## 2、 子ども防災キャンプ

災害対策本部の年間事業計画内で企画され、地域の有志がサポートし、立命館大学学生団体「TomSawyer」や、希望が丘のキャンプリーダーと県職員のフォローで運営。(今年立命館大学は試験の為不参加)

① 企画運営はまち協主導で行う。募集チラシ作成、小学校全児童対象配付、申込受付、参加証発行等、募集について事務局で実施。企画には参加いただく有志への案内や協力依頼、大学への申込み等も全て実施。

② 会場申込は 1 年前から実施（滋賀県文化公園野外活動センター)。
2022 年まではまちづくりセンターにて 1 泊 2 日で午前は近隣他県防災センターへ体験見学し、センターに戻り防災体験（段ボールベット組立、消火器使用、テント設営）を実施しドラム缶風呂体験。食事、ゲーム、就寝し、翌朝朝食作り、防災体験（しがいち防災研究所）して解散。
多くの団体のお世話になり延べ 20 名以上が交代で支えた。

③ **課題**：防災センター体験以外、全て地域の方々有志や団体様に動員かけ運営していたが、高齢化が進み有志の依頼も徐徐に厳しい状況に直面、今後の企画継続困難も時間の問題になってきた。

その為、滋賀県希望が丘文化公園のプログラムを活用させていただき防災関連の宿泊プログラム重視へ2023年から切替えた。

有志の方の顔ぶれも変わってきている。自分が興味有るか無いかも参加の可否判断になる時代。何でもかんでも地域貢献と言うフェーズは今は存在感うすい。→　アウトドアーブームを意識し勧誘。

### 3、わんぱくプラザ矢倉っ子事業

**「草津川探検」**

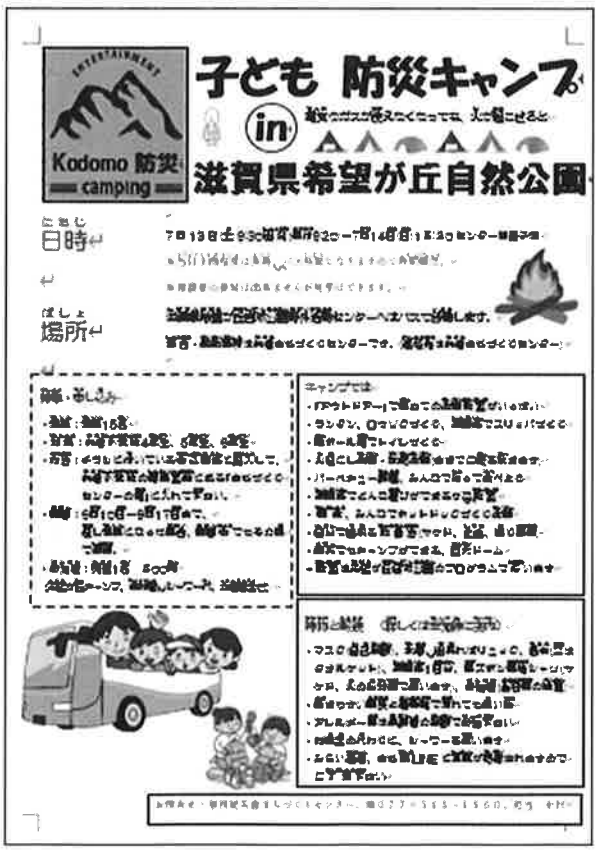
① 企画はまち協内の「元気な子ども育成推進部会」の年間事業計画の中で企画され、具体的な内容はまち協事務局で詳細を詰めて、募集から事業当日運営まで事務局が主導する。

② 企画内容監修は「滋賀県琵琶湖環境科学研究センター」へ協力依頼して主任研究員を派遣してもらい行う。
時期や募集内容にいたるまで、昨年を原則踏襲し実施結果を精査し微調整を重ねて継続している。
道具や備品は草津市クリーンセンター内「エコスタイルプラザ」から借用している。
準備段階で地域ボランティアの有志をあたり、隣接学区の宮町会館にも協力して頂いている。
活動場所の特異性も有り、滋賀県土木事務所への申請と河川敷草刈り計画でも協力頂いている。

③ 夏休み実施の為、「親子の夏休み」をテーマにしていて、募集チラシも「親子」を強調した。
以前は児童のみの募集だったが2022年以降は親子参加を意図して継続している。
保護者の参加率が高くなり、河川内の活動範囲を広げている。(大人の目が増えた影響が大)

④ 地域の有志で投網の実演もしてもらい、宮町会館のトイレを借り、まち協部会のメンバーが手伝って河川内監視、主任研究員から採取した生物の専門的な知識教わる。座学は橋の下利用の仮設教室。

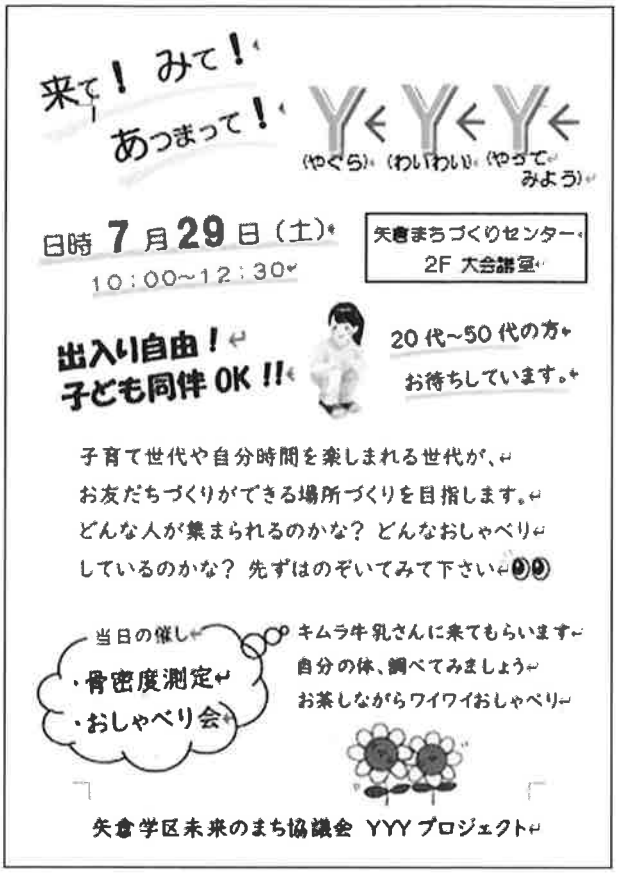
多くの人が関わって事業が出来ている事を親子で体験してもらう事が、自分の住んでいる地域への信頼に繋がり愛着が生まれ、地域協働参画意識へ繋がるのではと考える。



## 4、地域協働合校の役割と今後

### 「担い手不足対策の失敗から」

地域の事業を行う時に従来必ず各種団体の代表者が集まり、地域協働合校の会合が開かれて実行に向けた話し合いの場となっていたがまち協が設立され、徐々にその役割も変化してきたと思います。いま特に地域事業の実行に不可欠な担い手は、従来の活動を支えて来た方から次の方へバトンする大切な場づくりだと考えます。




① 担い手不足に対し、先ず地域でコミュニケーションを欲している方に集まれる場づくりを考えました。
当初は右記のような、特に分かり易さ意識して表現し集まってもらおうと呼びかけたが「直球」過ぎたかも知れず地域の都合を前面に出した事業で、その為住民の参加は少数だった。

② また、出席者からの要望は種々あるものの、個人的な物など不特定多数に関心を持ってもらい足を運んでいただけ、コミュニケーションに繋げるには難しい事ばかりだった。（イベント内容や設備不満が主となる）

③ 例えば右図のチラシで集客イベント的な取組も意識して組み込んでいたが、ニーズと合致しなかった。　健康は若い層も関心があると考えたが違った。

[第１段階]

④ 今までの事業で児童の保護者に焦点を当てた事は無かったが、「元気な子ども育成推進部会」が主催する**ミニ四駆教室**は保護者の参加希望が異常に多かった。
参加した保護者と会話していると参加の可否は保護者が懐かしくて決めたとの意見が多かった事から、保護者に関心を持ってもらえ児童と一緒に参加できる事業は保護者同士のコミュニケーションに一役かうのでは考え、子ども事業の軌道修正を図りました。

[第２段階]

⑤ 子ども事業を再編しバラバラだった**組織を１本化**した。担い手が減少し各々の組織が会合でも集めにくくなってきた事から小さい組織から統合して総人数を増やし１人当たりの負担を減らした。
それに伴い、センター**役員用公式 LINE** の運用はじめ、案内や計画を一斉同時に流しコメントも返してもらえるツールを使用しペーパーレスと時間短縮で作業効率化も実施。

[第３段階]

⑥ 子ども事業の中で地域の有志に従来から参加頂いている事業に、上記の組織１本化したメンバーも可能な方のみ参加いただくように案内。（従来は各団体ごとだったが）
新規も特に館外事業でのボランティア参加者を広く声がけするよう取組を始めた。（大学学生団体にも）
子ども事業に大学生学生団体の講座を導入（立命館大学ライフサイエンス研究会）。
子ども食堂事業に立命館大学学生団体 BohNo の「手作り給食」「手作りお菓子」を定例化。
ふれあいまつりでのアウトソーシングや学生参加団体の拡大等、地域ボランティア**１人当りの負担軽減**等、地域事業への参加ハードルを下げる事も同時に行っている。